



連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」は、こちらから見るができます。  
最新の第16回を公開中!

いる」と思っていたのでしようね。  
子どもたちからみたら、学生は、先生でも、親でも、友だちでもない面倒な存在だったかもしれません。でも、「こうしなければ」ということがなかったの、子どもには学生とのそれぞれの関わり方があり、それを期待してやって来るようでした。私は、エンドレスでピアノを弾くように求められたり、溝に石を落とすのに半日つきあたり。一応、設定活動はあったのですが、乗ってくれることは少なくて。結局は思いきりつきあって、子どもたちは満足した顔で帰って行きました。

子どもも、保護者も、学生も、それぞれが主体となって活動していた。それが当時の障害児学童だったのかなど。

私たちが学生であった頃は、就学権保障の運動のなかから生まれた不就学児の遊びの会があり、学生ボランティアが活躍した時代でした。養護学校義務制実施（一九七九年）を経て、子どもは学校に通えるようになりましたが、長期休暇や休日には家でポツンと一人、テレビと向きあうだけの生活でした。保護者が力を発揮し、教師も加わり、サマースクールや障害児学童が各地に拡がりました。そ

の活動のなかから障害児の放課後活動の大切さが共有され、制度化を求める運動がとりにまれました。そして困難を乗り越えて、児童福祉法の事業として「放課後等デイサービス」がスタートしたので（二〇一二年）。この制度化、その後の条件整備を求める運動の中心は、かつて学生ボランティアとして障害児学童に参加し、この活動に人生をかけてきたと言ってもよい人びとです（村岡真治『障害児の人格を育てる放課後実践』全障研出版部など）。

放課後等デイサービスになってから、保護者はどの事業所と契約するかが主たる関心になり、活動内容やスタッフの体制を案ずる必要もなくなりました。学生たちの多くは、ボランティアではなくアルバイトとして関わっています。先の卒業生は、その過渡期に活動していました。

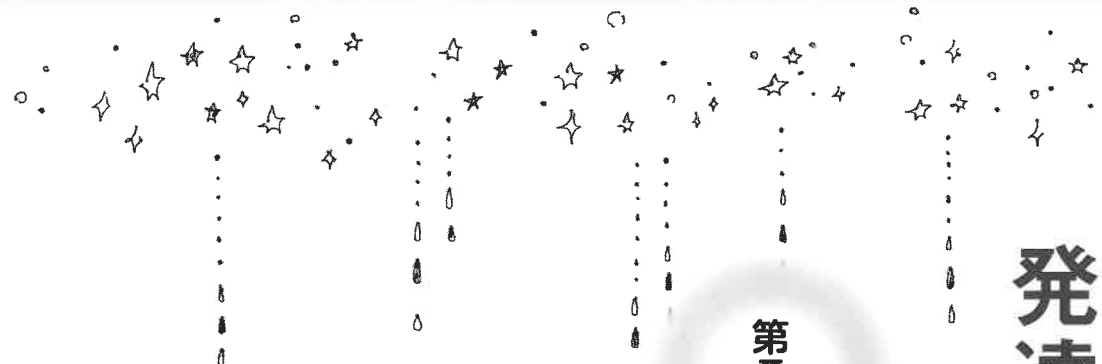
**急かされず、否定されず、信頼されて**

私たちは、映画「世界一すてきな僕たち私たちへ」（宮崎信恵監督、ピース・クリエイト、二〇一三年）を、学生とともに鑑賞してきました。東京都江東区の放課後等デイサービス「こびあクラブ」（以下では映画内の呼称「こびあ」）の

活動を記録したものです。  
せいいちろうくんは、公園への道で交差点にさしかかりますが、渡らずに大好きなプールの方へ歩こうとします。仲間が交差点の向こうに行くのを見ながら、歩道に座り込んでしまします。一度は立ち上がり交差点を渡るのですが、また寝転んで怒りつづけます。そこには、戸惑い一つも苦しい思いをいっしょにこらえようとする職員の姿がありました。やがてせいいちろうくんは、ゆっくり起き上がり、「わかったよ」と言いたげにそつと職員に抱きつき、みんなの後を追うように歩き出したのです。

「自分の心に描いていることと現実と起こっていることのギャップがあって、スムーズに心を切りかえることがむずかしいのです。こびあに通う子どもたちは、言葉をほとんどもちません。それは想像以上にもどかしく苦しいことに違いありません。しかし、自分から起き上がったのは、そんな自分を受けとめてくれる人がそばにいるという確信を得たからでしょう」とナレーションは語ります。

たくまくんは、地域の子どもたちとの「焼き芋の会」に参加していたお母さんといっしょに帰りたくて、力一杯しがみ



# 発達の中の

# 煌めき

## 第II部

発達の共感が創り出す実践

—歴史に学び、今をみつめ、未来を創る

### 白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

## 第10回 放課後活動ではぐくまれるもの

### 障害のある子どもの放課後活動

あるとき大学の授業で、今も記憶に残ることを聞きました。「障害児学童」にボランティアとして関わっていた学生からでした。「障害児学童は、支援のクオリティは低いかもしれないが、代えがたい価値があるのではないか」。そう語ってくれた卒業生に、一〇余年たって、その意味を尋ねてみました。

その年の学生は頼りなかったもので、保護者は心配されていたと思います。電車でお出かけすることも多く、この学生たちに我が子を預けて大丈夫かと思われていたかもしれません。あるとき、お出かけ先の下見に付き添ってくださったのを憶えています。私は、「心配しすぎじゃないか。学生だけのびのびさせてほしい」という気持ちもありました。保護者は、毎年の学生を見てきて、一人ひとりを育てるためにどうしたらよいかを話しあわれていたのではないかと思います。その年が終わる頃、ある保護者の方から「本当に成長したね」と言われました。

それを聞いて、「私が育ててもらっていたんだ」と気づいたのを憶えています。それまで「私たちが支援してあげて